

文樂座初めて松竹に移る

その前後の事情と今後

代々植村家の經營に繋るわが傳統の人形淨瑠璃文樂座は、遂に明治四十二年三月をもつて白井大谷兩社長の經營に成る松竹合名會社の手に移ることゝなつた。

既に前項に述べて置いた通り、文樂座の第一世文樂軒が淡路から起り、大阪に移つて、三世大藏こと、即ち有名なる文樂翁に及んで、人形淨瑠璃の代名詞かの如く文樂の名を高め、四世大助に及んだ。大助は溫良人だが骨董癖があつて、書畫骨董の賣買を爲し支那の方面へまで手を延ばしたりして、随分大損をしたらしく、明治十四年頃には可なり窮境に陥つてゐた。その頃同じ骨董仲間の知人に京都寺町の渡邊幸次郎といふのがあつて、此人が相當に理財に長じてゐるところから、整理を依頼したのが縁となつて、爾來この渡邊が植村家の財政を整理して良好の結果を見、顧問のやうな位置に在つたので、従つて文樂座の經營にも參劃してゐたのであ

る。さうして明治二十一年から三年の頃に至つたが、三世の名文樂翁も四世の骨董の大助も死んでしまつて、のこるは大助の未亡人春子（通稱おあいさん）と實子泰藏とになつた。泰藏はとりも直さず五世文樂座々主であるが、この泰藏は常に病身であり、素行もよろしくなくとも文樂座を經營するほどの才幹でもなく、後には遊蕩の結果狂死したといふほどの人であつたから、さすがに代々續いて文樂座を經營した植村家も、何分三十年來の累續した財政難のために、いよいよ最後のどたん場まで逼迫し、大手術を加へねばならぬ窮地に陥つた。

その泰藏を補佐する未亡人春子、顧問格に在る渡邊、文樂座の槽下として大責任ある攝津大掾、此人々の心配は並大抵ではなかつた。日々否運に傾く植村家の社稷も去ることながら、日本傳來の固有藝術として嚴存する人形淨瑠璃が共にその厄難に逢ふことは到底忍ぶ可からざることであつた。而かも泰藏はかゝる難局に立つ器でない、春子、渡邊、大掾、もとより其經營の任にあらず、此上は然る可き後繼者を選んで讓渡し、文樂座を完うすると共に植村家を救ふこそ眞實に賢なる道と知つて、深くも決心をしてその後繼者を物色すること四年五年と經過するうち、當時京都から出身して、日の出の勢ひで興行界を風靡してゐる、白井大谷の松竹合名會社こそ頼むに足るものとして、讓渡しの相談を持ち出すことになつた。

さてその相談を胸に抱いて最初に松竹の白井社長にぶつかつて見たのは、誰れであらう。文樂座の興廢を全く自分の責任であるとはかり痛感してゐた攝津大夫である。文樂座のいよいよ窮迫した實狀を見ては、座主植村家の衰亡もさることながら、それよりも何よりも傳統久しい淨瑠璃藝術を、自分の代で亡ぼすやうなことがあつてはならぬと心を痛めた攝津は、老軀をひつさげ、直接白井社長に面談を申込むことに決意した。そこで攝津は腰巾着の妻女おたかと共に、難萬の一室に白井社長と會うて、しみじみと語り合つた。それは人形淨瑠璃の生命擁護、引いては文樂座繼續興行の問題で、植村家經濟の事情も含まれてゐた。

この老攝津の誠心誠意、泣かんばかりの文樂愛著の衷情に動かされた白井社長は、文樂引受けの快諾を直に與へたから、攝津の喜びは譬へるにも無かつた。『白井さん、ちよつとお手を拜借』と、この道での誓ひのしるし『手打』を了つて感激の極に達した。もしもこの申込の對手が春子夫人なれば、或はどんな結果になつたか知れぬが、眞實、邪念のない攝津なればこそ、白井社長を感激させ、トントン拍子に一瀉千里の解決が見られたのだと思ふ。

それで、座名は言ふまでもなく其まゝに尊重して繼承し、更に時代に應じて、よりよく推移することを誓つて、話は頗る順調に進み、圓滿讓渡の約束成立。この引渡しに於ても、現に白

井社長は只一回文樂座を見物したゞけであつたといふことによつても、如何に兩者の間に意氣投合した情景が展開しられたかゞ知れるであらう。これ即ち明治四十二年一月のこと。

いよいよ三月には御靈神社境内の文樂座は現姿のまゝ、二棟の土藏の人形或ひは衣裳、繪看板、臺本、その他一々取調べるといふことなく、有り姿のまゝといふ風に極めて圓滿寛裕な取引のうちに譲渡しが出來、登記を終つて、完全に植村家の手から離れて松竹合名會社の所屬に移つた。

引繼ぎの座員。太夫三十八人。三味線五十一人。人形遣ひ二十四人。

この引繼ぎ第一回の興行が（四月八日初日）、『先代御殿』攝津大掾、『お俊傳兵衛堀川』越路太夫、『廓文章吉田屋』南部太夫其他拵合で、賑々敷開場されて、夏季休業中に大修繕が行はれ、舞臺内外の面目を一新した。

その年の暮れ、松竹では、來春興行から更に左記の大改革を實行することを發表した。

(一)從來技倆ある者でも、因講の顔ぶれに於て位置低き者は、役付き悪しく、唯々古參の者のみを引上げた舊慣を廢して、技倆優秀の者は、太夫三味線人形遣ひを問はずこれを拔擢して大役を授け、充分に働かせるのみならず給金もその成績によつて増減する。

(二) 三味線の表附面には従來出演しないものを記して其位置を保たしめてゐるが、今後これを廢し、古參者でも技倆劣れば下級に下し以て後進の爲めに道を拓く。

(三) 引幕、一文字、膝隠し等のうちには如何はしい不體裁のものがある。廣告に類するものもある。これ等は一切寄贈を斷り、體裁よき綴帳だけ受ける。引幕一文字は座名を記したものをを用ひる。尤も御簾ぶち、木戸前の千軒幟、積物等は、従前通り受ける。

(四) 従來場内の天井に吊つたフラフ等の裝飾物は第一太夫の聲に障り、看客の目障りになるから廢止する。

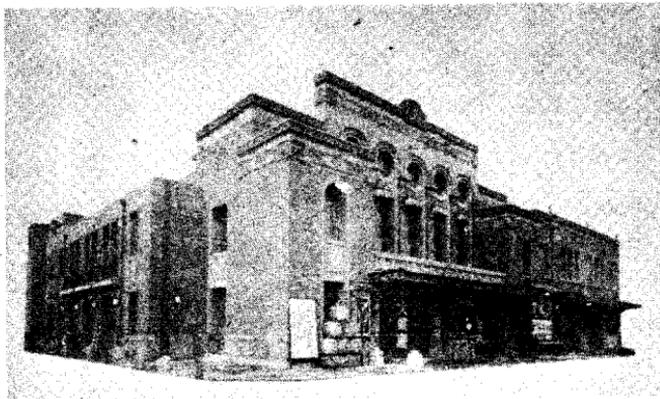
以上あるものは實行されたが有名無實のものも少くはない。また舞臺方面での改革としては、この初春興行から、技藝監督といふ役員を新設して、太夫、三味線、人形遣ひ、の三派から、一派一人づつを毎日交代させて早朝序幕から出勤させ、後進の精進ぶりを監督せしめた。その役員には、太夫から、染、越路、七五三、南部、津。三味線からは、廣助、猿糸、清六、吉兵衛、廣作。人形からは紋十郎、玉治、玉治郎、榮三、玉五郎、玉七、三左衛門などが選まれて此任に當つた。併しこの掟はやはり永くは續かなかつた。

明治も三年を経て改元、大正となり昭和となつて、文樂座が松竹經營と變つてからこゝに三

十余年。大正昭和の史録は總て本篇には省いたが、今一度振返つて、明治維新以來の植村文樂時代を概見すると、大柱石長門太夫がおよそ四十年間、文樂の本城に籠つて至藝を發表すると同時に、藝道猛訓練を奨勵、門戸を開放して藝能の人材を抜擢して新味を出すことに努め、文樂座主植村文樂翁（三世大藏）もこれに應じて名企劃を案出、長門歿後の文樂座に善處したから、座運は隆々と昇つた。その一例を上げると、稻荷祭に一座を擧げての大歌舞伎を上演、師匠には多見藏延若翫雀を煩はし衣裳背景も本格で大がかりの贅澤さ、莫大の費用をかけながら、無料で、平素のヒイキ筋文樂フワンの全招待として開放した。これはヒイキ客と出方と興行主との相互親和をねらつた文樂翁の秘策で、やがてそれが文樂繁昌の基因ともなつた。謂は一石幾鳥かの名案で、損して得を取る文樂翁の賢明さを見せてゐる。こんな風に總じて順調に進んで來た。しかしその間、二三の波瀾もないではなかつた。或は春太夫と越路太夫の師弟戦とか、越路の櫓下問題の紛擾とか。それ等に關して盲人住太夫、梶太夫（後に八代染太夫）、湊太夫等が、所謂文樂傳來の藝の正道として誇る『文樂精神』の低下を嘆いて文樂翁への建言事件。また三人櫓下の現出、團平と玉造の争ひ、團平退座など、相當の事件もあるが、これは又別に『文樂側面史』の資料に屬すべき性質のものであらう。

文樂翁の歿去後、後繼座主がその人を得なかつたことは前述の通りで座運はだんだんと傾いて來た。始祖文樂軒が大阪出現以來久しく斯界に君臨して、大きな功績を遺してくれた植村の文樂座も、その五世の代になつて惜しいかな遂に没落、かくて明治四十二年、松竹の手に移ることとなつた。

松竹の文樂座としてのその後の興行態勢は、どんな風に動いて行つたかと云ふと、時に消長はあつたが、概して小康を保ちながら、ヤツと續けられたといふ實情で、これと云ふホツコリとした成績も上らなかつた。そこへ突如として降つて湧いた災厄は昭和元年十一月廿九日の失火、文樂座の全焼である。さらぬだに面白くない從來の興行成績の上に、この大痛手を受けたのであるから、世間では、これを機會に或は松竹が手放すのではあるまいかと疑懼したものが、事實はそれに反して、引續いて道頓堀での借家興行や、困難な旅興行に轉じながらも、尙ほよく興行を持續することに努めてゐた。そして昭和四年の冬、四つ橋の今の地に立派に新築、更生の雄々しい姿を見せてくれた。これはひとり文樂ビィキの悦びばかりでない、郷土大阪の悦びであり、また傳統藝術を尊び日本精神を誇る全日本國民の悦びでもあつた。この長い間の文樂不振時代を持ちこたへ、火難の襲來にも屈しないで、巨費を擲つて新劇場を建設した事實



四橋文樂座

に見て、さすがに松竹ならではの感が深い。この點、營利を離れて郷土藝術を愛護した座主白井松次郎氏の熱情は、大に多とすべきものがある。

かくして新築成つた文樂座は、最初の程こそ新劇場拜見の客も混つて賑うたが、年を経るにつれて、又々舊態に返つて行つたのは是非もない。それに近年には鏝、駒の驍將を失ひ、殊に津、土佐の兩首將まで亡くした寂莫は大きい。さて之等を補填する將兵の備へが果して出來てあるかどうか、先人名匠の血の出るやうな難行苦行は、單に明治時代の昔話として看過してよいのであらうか、今日の大轉換期を前にして文樂藝術の今後に處する對策が特に當局者たちに考慮されてゐるかどうか。目前に斯うした重大な問題が澤山に横たはつてゐる。淨瑠璃節生れて五百年、革新の巨人義太

夫が現れて二百五十年、昭和の今は淨瑠璃史上、ちやうど大きな一つの『フシ』に當つてゐる、まさに千載一遇の好機か——危機か、余りにも言ひ古した言葉だが、我が文樂關心者の慎思善處すべき秋であらう。